

〈作品 007〉

NEW GATE

ベイエリアと都心部を結ぶ場所

長谷川夏輝（富山大学 都市デザイン学部 都市・交通デザイン学科）

上埜由美子（同）、王永成（同学科 助教）

奨励賞

NEW GATE

ベイエリアと都心部を結ぶ場所

安治川水門は、時代の変化とともに人々の生活に寄り添ってきた存在である。これまでも自然災害から人々の命を守るという縁の下の力持ち的役割を果たし、これからもその役割を担っていく。

そして近年の大阪の活発なまちづくりは安治川水門にこれまでとは異なる表舞台的な役割を与えようとしている。

それは人々を迎える新しい「門-gate-」下流側にあるベイエリアへ、または上流側にある中之島など大阪の都心部へ通じる門としての役割である。

本提案では、その両エリアを結ぶ場所として安治川水門周辺及び弁天埠頭を捉え、大阪のまちを陸上や海上で行き交う人々の交流そして余暇空間を整備する。



Night

morning



安治川と様々な流域

安治川は、中之島の西端から始まり、安治川水門を抜けて弁天埠頭、そして夢洲などのベイエリアがある大阪湾に流れる。



(a)



(b)

I. 中之島

中之島は江戸期に年貢米を扱う蔵屋敷が多く集まる物資拠点、明治から昭和初頭にかけては東洋一の商工都市として栄えた。大正期に建設された近代モダン建築や橋梁などが現在においても残っており近代大阪の優れた都市景観を形成されている。(a)

2008年に中之島を中心に、堂島川、土佐堀川の他、安治川、大川の一部が河川空間を活用する社会実験区域として指定されたことで、北浜テラスや川の駅はちけんやなどまちなかで水辺に親しむ空間が複数整備された。(b)

これらは「河川空間のオープン化」活用事例として国土交通省による「河川空間のオープン化活用事例集」で紹介されている。



(c)



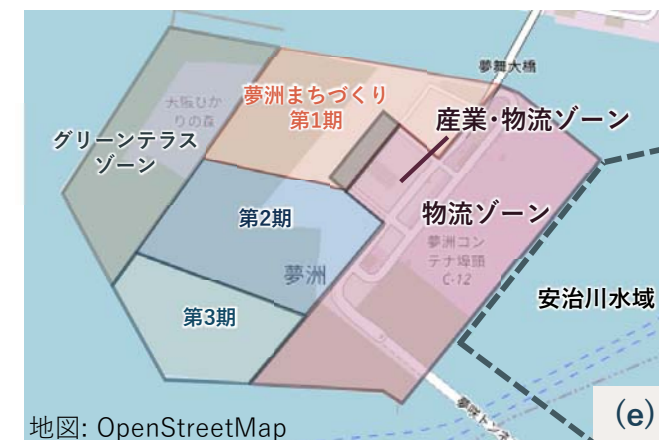
(d)

II. 弁天埠頭

弁天埠頭は、1965年に安治川内港の旅客船ターミナルとして整備された。弁天町駅に近く利便性の高いため四国・九州への旅の玄関口として発展してきた。埠頭近くには船客待合所や土産店を設けたターミナルビルが建設され大きな賑わいを見せた。(c)

しかしモータリゼーションの進行により船客ターミナルの機能は次第に弁天埠頭からカーフェリーに対応した南港フェリーターミナルに移っていった。

その後1995年に弁天埠頭を発着する航路が廃止された。旧ターミナルビル(現:加藤汽船ビル)は建物の西側半分が解体されたが、企業が入居しており現在も使用されている。(d)



地図: OpenStreetMap

(e)

III. 夢洲・咲洲

咲洲や夢洲など大阪のベイエリアは、近隣のベイエリアと併せて関西圏の発展の鍵となる地域である。特に夢洲は、2025年に開催予定の大阪万博の会場となるエリアで洲内の開発が盛んに進められている。

夢洲は国際観光拠点として注目される他、産業・研究開発の拠点となることも期待されており、国際的なMICE施設やベンチャー企業等の育成環境の整備が進められている。安治川は、夢洲まちづくりのイメージにおいて産業・物流ゾーンとなる地域を水域に含んでいる。(e)

出典

(a)(b): 水都大阪コンソーシアム

(c): <https://www.city.osaka.lg.jp/minato/cmsfiles/contents/0000160/160768/2210.pdf> より抜粋

(d): コンペ参考データ

(e): https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/37152/00337510/21_siryou2-1.pdf を参考に作成

安治川水門周辺と弁天埠頭

対象エリア内で、特に「弁天埠頭」は水都大阪の水辺として発展途上である印象を受けた。安治川水門のデザインと併せてこの地域を主対象に本提案を考える。



(a)

安治川水門改築計画の現状

大阪府の三大水門景観検討部会は三大水門の新たな形式として、経済性や津波、高潮水門としての機能性に優れた引上げ式構造ローラーゲートを採用した。今後は老朽化の進行程度から、木津川水門、安治川水門、尻無川水門の順に改築される予定である。最初に改築される予定の木津川水門は2020年度より景観検討が進められイメージパースが作成された。(a)

安治川水門の立地は、弁天埠頭など周辺地域の再開発計画が進められていることや中之島と夢洲などのベイエリアを結ぶ舟運ルート上にあることから、将来多くの人々から注目されることが予想される。安治川水門は安全安心のシンボルであることに加えて、水都大阪のプロジェクトや周辺のまちづくりを考慮してデザインを検討する必要がある。



(b)



(c)

安治川水門周辺の護岸の現状

護岸は、河川の水際線を構成する構造物で、河川の風景の中でも目立つ要素である。中之島西端から安治川水門にかけての乗船写真より護岸は擬石護岸、一部鋼矢板護岸が整備されていることが分かる。(b)

全体として単調な印象を受けるほか擬石護岸の一部には落書きが見られ、中之島-夢洲を結ぶ舟運ルートとして、また人々の身近にある河川空間として景観上の課題があると思われる。(c)



(d)



(e)

弁天埠頭の現状

弁天埠頭は現在公園として使用されているが川に面する位置が木々や塀で遮られ、水辺を視覚的に楽しむことが困難になっている。(d) またかつての船着場は通常、封鎖されていると思われる、水辺に近づきにくくなっている。

一方で、2020年11月に行われた港区による舟運社会実験「海まち弁天STREET」では弁天埠頭-舞洲（往復）、弁天埠頭-天保山西岸壁（往路のみ）で舟運が行われた。(e)

参加者は52名で、弁天町駅から弁天埠頭まではシェアサイクルも活用された。特に弁天埠頭～舞洲航路について参加者から概ね高評価を得る結果となった。弁天埠頭は、大阪市港区のまちづくりにおいて、水辺の魅力を生み出す拠点として再び注目されていると言える。

コンセプト

NEW GATE バイエリアとまちなかを結ぶ場所

大阪市の西部は高潮がおりやすい地域で昭和期には台風による高潮で大きな被害を幾度も受けた。安治川水門はこの地域を高潮から守るため1970年に建設され、約50年に渡りその役割を果たしてきた。そして2011年の東日本大震災発生を契機に、津波発生時にも対応できることが望まれ、改築されることになった。

安治川水門は、時代の変化とともに人々の生活に寄り添ってきた存在である。これまで自然災害から人々の命を守るという縁の下の力持ち的役割を果たし、これからもその役割を担っていく。

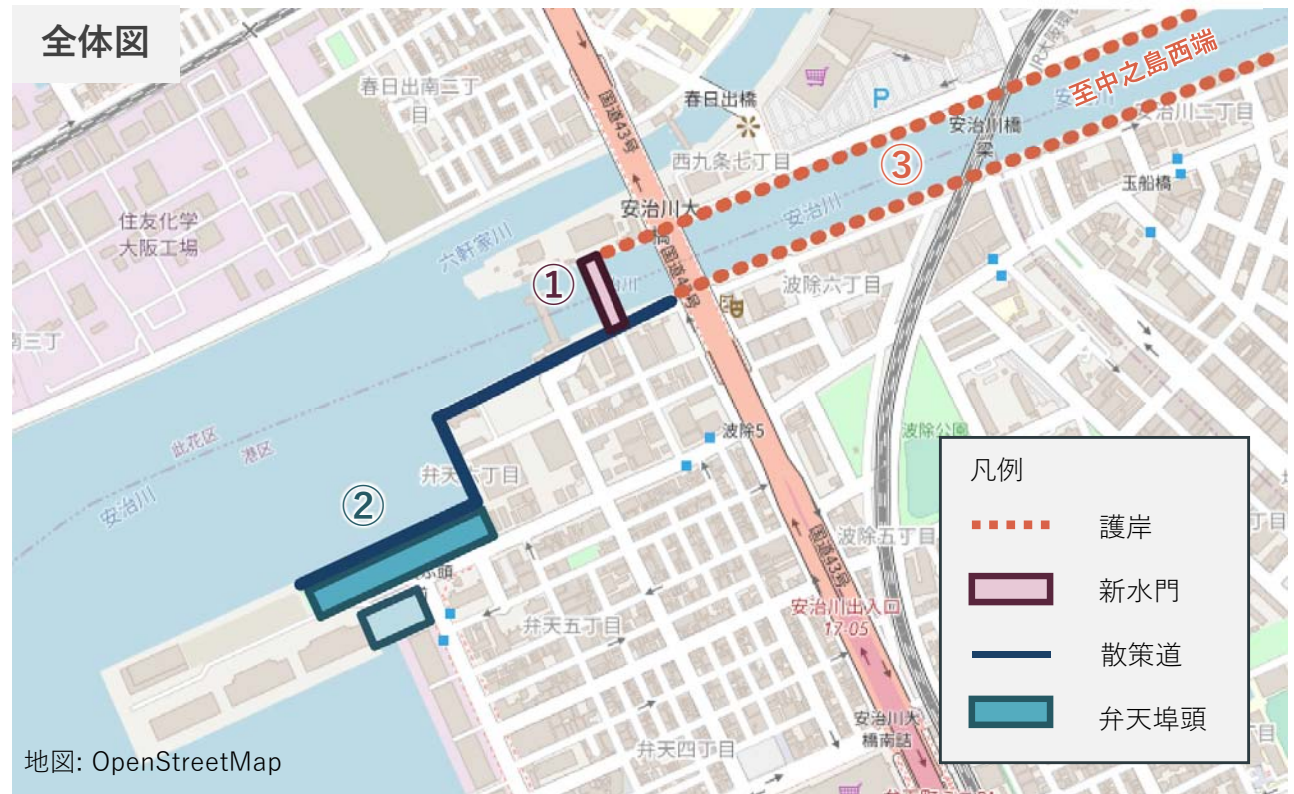
そして近年の大阪の活発なまちづくりは、安治川水門にこれまでとは異なる表舞台的な役割を与えようとしている。それは人々を迎える新しい「門-gate-」下流側にあるバイエリアへ、または上流側にある中之島など大阪の都心部へ通じる門としての役割である。

バイエリア及び大阪都心部ともにまちづくりの機運が高く、両エリアが融合する機会が増えれば更に人々の暮らしを豊かにし、わくわくする未来が創り出せる。

本提案では、その両エリアを結ぶ場所として安治川水門周辺及び弁天埠頭を捉え、大阪のまちを陸上や海上で行き交う人々の交流そして余暇空間を整備する。

全体計画

本提案の計画と募集要項で示されている「提案を求める対象エリアの対応関係は以下のとおりである。



① 新安治川水門および管理所敷地

募集要項に指定された地点にて新安治川水門のデザインを検討し、管理所は新水門の両脇に付属させて計画した。なお本提案では、現安治川水門を解体・撤去することを想定している。

② 弁天町周辺エリア(弁天埠頭・オーク商店街等)

本提案では、弁天埠頭公園及び弁天埠頭緑地の再整備を検討した。再整備計画では、敷地の造成及び水辺の複合施設等を提案している。

③ 安治川水域(中之島-夢洲)

本提案では、中之島西端から安治川水門周辺にかけての護岸のリニューアルを検討した。

新安治川水門のデザイン



デザイン 検討のポイント

構造形式は他の三大水門と同様に引上げ式構造ローラーゲートを採用した。その際景観性に配慮して、水門高さを抑えたり構造物の重たい印象を和らげるため扉体、門柱及び堰柱の形状等を工夫した。管理所は安治川左岸に設け、水門に隣接させた。

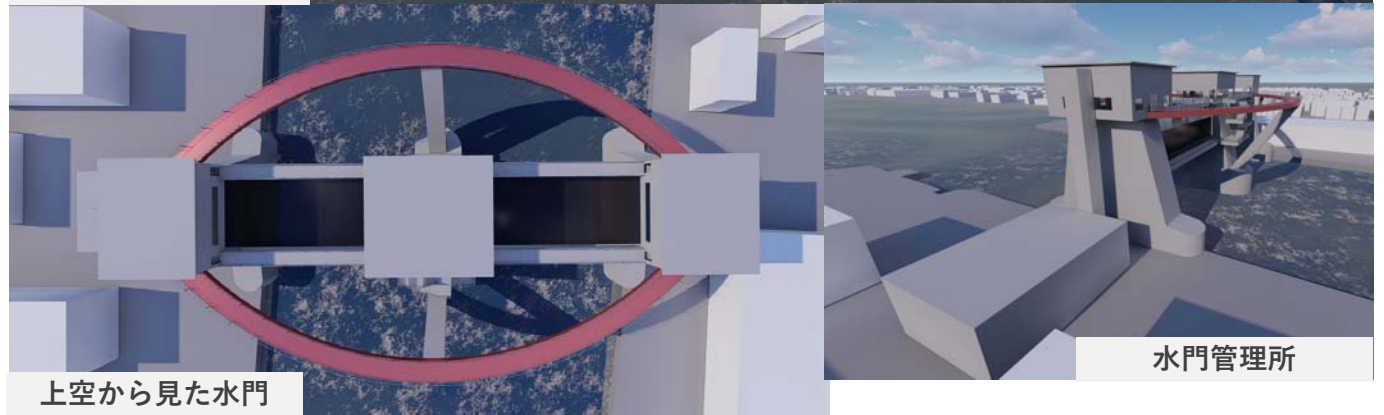
展望空間は展望橋を通して移動することができる。展望橋は現安治川水門が稼働している

ときの形状をモチーフとし、約50年に渡って大阪を守ってきた現安治川水門のイメージを継承することにした。

都心部及びベイエリアを結ぶ舟運ルートに位置する安治川水門は、今後人々の注目を浴び観光スポットとしての機能も期待できることから左右の巻上機室を展望室としても活用することを検討した。



上流から見た水門



上空から見た水門

水門管理所

扉体二段式(ダブルゲート)構造を採用

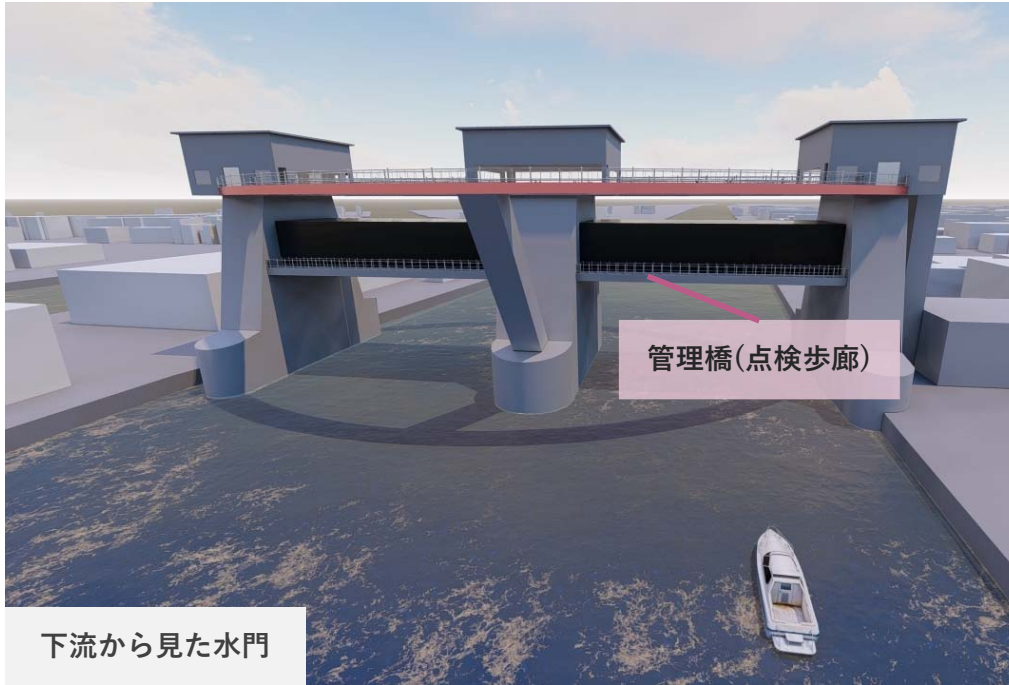
シングルゲート構造の場合は扉体が垂直方向に高くなりそれに比例して水門全体も垂直方向に高くなる。水門が高くなると景観性に優れないためダブルゲート構造にし、高さを抑えた。

門柱と堰柱のデザイン

門柱は勾配をつけることで水門を横から見たときに周辺の景観に馴染むようにした。堰柱は曲線にし、周辺の景観に馴染むようにした。木津川水門計画案と同様に上面に勾配を設け、水がたまりにくい形状とした。

管理所とエレベーター

管理所は水門に隣接して配置した。水門の管理所としてだけでなく、展望台への入場口としても利用することを想定している。エレベーターは管理所から巻上機室にアクセスするために設け、作業員用と観光客用で分けて計画した。

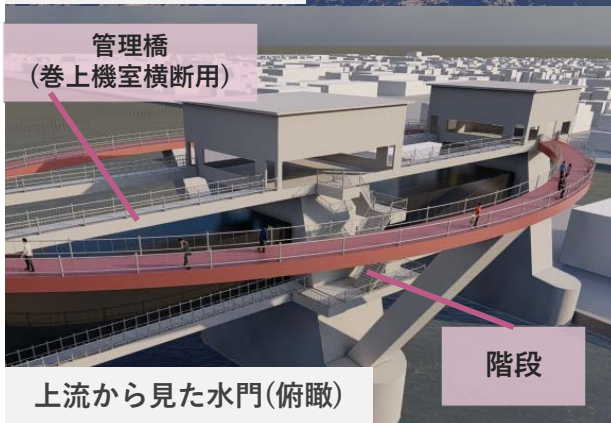


下流から見た水門

管理橋(点検歩廊)



水門展望橋

管理橋
(巻上機室横断用)

上流から見た水門(俯瞰)

階段



水門のライトアップ



災害時のイメージ

巻上機室(展望室)

展望台としても使用するため、左右の巻上機室を展望室と併用した。展望室としても使うため4面に窓ガラスを配置した。

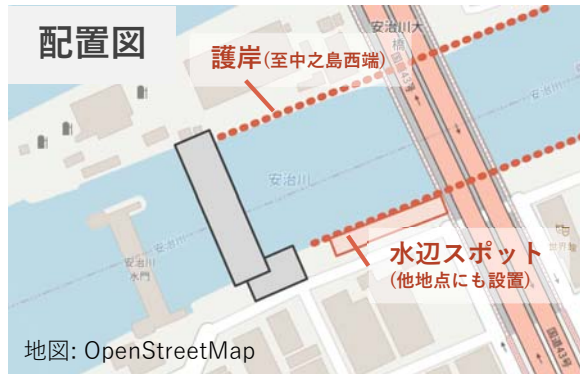
展望橋

現安治川水門の稼働時の形状をイメージして設計した。現安治川水門の要素を取り入れつつ、新しい安治川水門の重要な要素である展望台としての機能を集約する。

管理橋

管理橋は、巻上機室間を接続するものとゲートの点検歩廊として使用するものを設置し。また中央の巻上機室から直接ゲート点検歩廊にアクセスできる階段を配置した。

護岸とストリートファニチャー

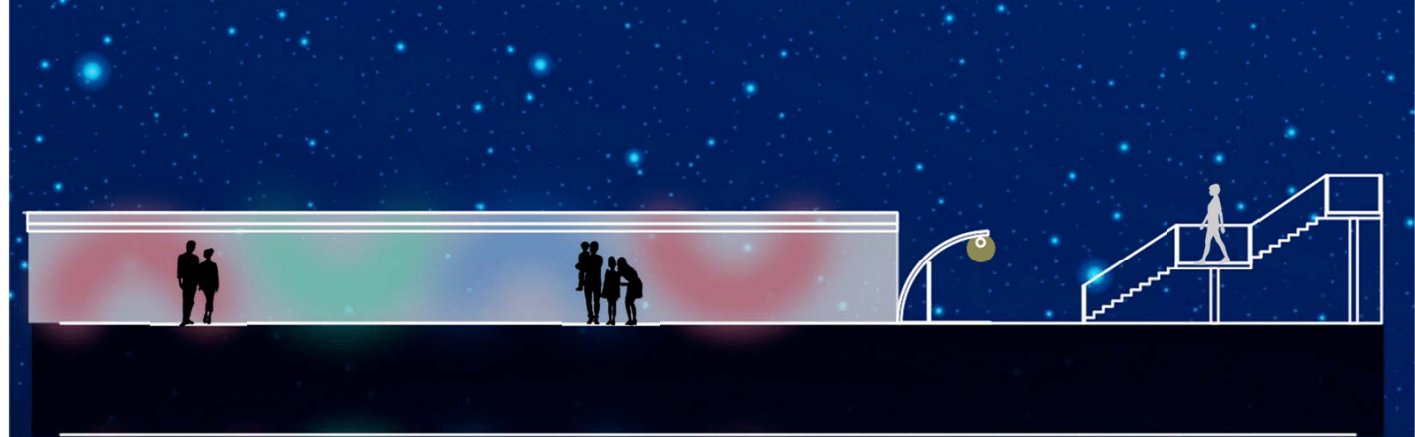


デザイン 検討のポイント

護岸は鉄筋コンクリート造で、表面はコンクリート打放し仕上げとした。一定区間ごとに水辺に近づくスポットを設け、ライトアップによる夜間景観を楽しむことができるようにした。なお通常時は護岸の点検場所として利用することを想定している。

スポットには、ストリートファニチャーとして案内板やベンチを設置する。ストリートファニチャーには、約50年の間縁の下の力持ちの役割を果たしてきた現水門を今度はより人々の身近で活躍できるように現安治川水門解体時に出る材料を使用して製作し、アーチ(円弧)部材を取り入れたデザインを検討した。

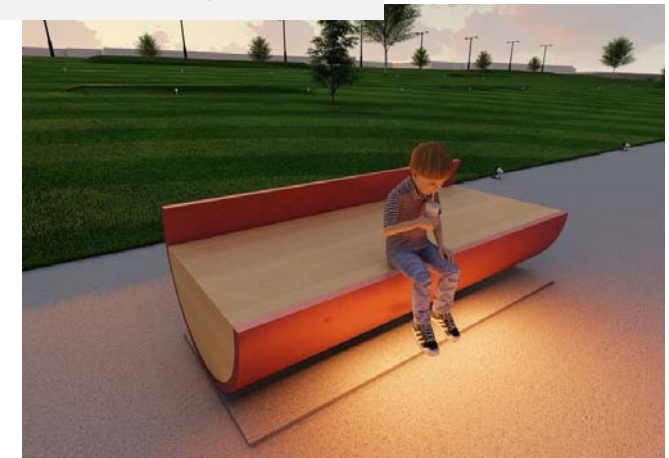
ストリートファニチャーは弁天埠頭の屋外広場等にも設置することを想定している。

水辺に近づくスポット
scale1:200

夜間のライトアップの様子

ストリートファニチャー①
シェルター

シェルターは案内板の設置場所や駐輪場としても利用できる。また円弧状の部材の先端部分に照明を設け、夜間の道路照明としても利用できるようにした。

ストリートファニチャー②
ベンチ

ベンチは、足元を照らすことで夜間のライトアップツールとしても利用できるようにした。

弁天埠頭再整備計画

コンセプト

水辺をひらく

現状、近づきにくくなっている弁天埠頭の水辺空間を人々にひらく。
水辺のひらき方については次の三つを検討した。

I. 水辺を楽しむ余暇空間としてひらく

カフェやレストランなどのある複合施設と水辺に親しむ屋外広場を計画した。

II. 舟運の拠点としてひらく

旅客向けの船着場を整備するとともに、遠方からの利用客の呼応通手段の乗り換えに対応するため、弁天埠頭緑地に駐車場・駐輪場を計画した。

III. イノベーションの拠点としてひらく

ベンチャー企業等の成長を支援することなどを目的としたオープンイノベーション施設及びビジネス利用のための船着場を計画した。

その他

既存の加藤汽船ビル(旧ターミナルビル)は一部改修し、複合施設等の運営会社の事務所が入居することを想定している。
その際既存入居者は引き続き入居できるよう配慮する。

弁天埠頭全体図

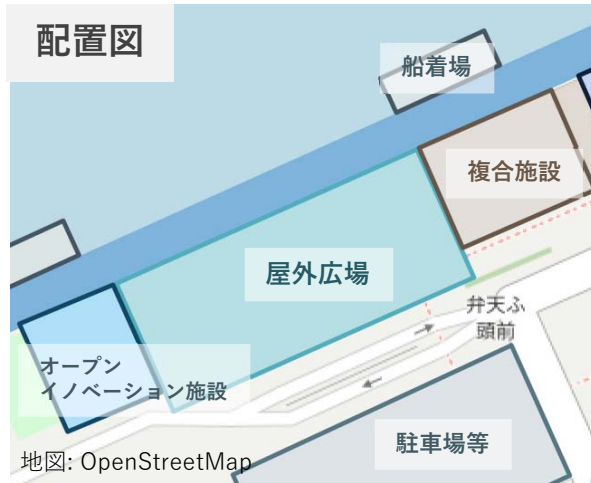


地図: OpenStreetMap

水辺から見た弁天埠頭



水辺を楽しむ屋外広場



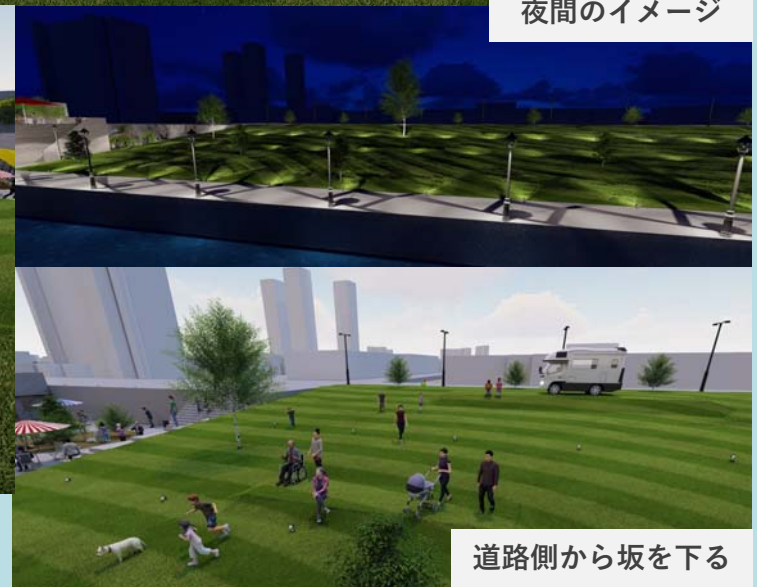
安治川・ベイエリアを望むことができる開放的な芝生

再整備計画の敷地の中心部に人々が水辺に親しむ屋外広場を整備した。

ただの芝生ではなく、少し勾配をつけることで坂になり川方面を望みながら休憩できるように配置する。

都会の中にはない開放的な空間であることを活かし、ベイエリアとまちなかの間にある都会のオアシスのような役割を担うことを想定している。

坂の中に平場を設けることでベビーカーを利用する家族づれや車椅子利用者に配慮した。広大な芝生の空間は、屋外イベント等での活用も想定している。



水辺の複合施設

配置図



水辺と緑の余暇空間

舟運の通過点として乗船・下船する人や水辺を散策する人が食事や買い物を楽しむことができる複合施設を整備する。また建物の一部に貸スペースを設け、水辺を臨みながらの屋内イベント等に活用してもらうことを検討した。

建物南東角には中庭を設け、利用者が植物を眺めることにより得られる豊かさや安らぎ感の向上の効果が得られるようにした。2階の屋外テラスからは中庭のほか、弁天埠頭の水辺を眺めることができる。

施設案内

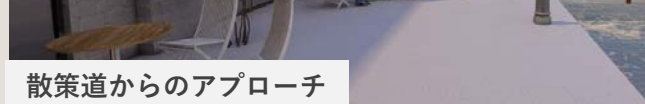
- 1F レストラン
 屋外テラス
- B1F 舟運チケット売場
 お土産店
 カフェ
 管理会社施設内事務所
 貸スペース



水辺より建物を臨む



中庭

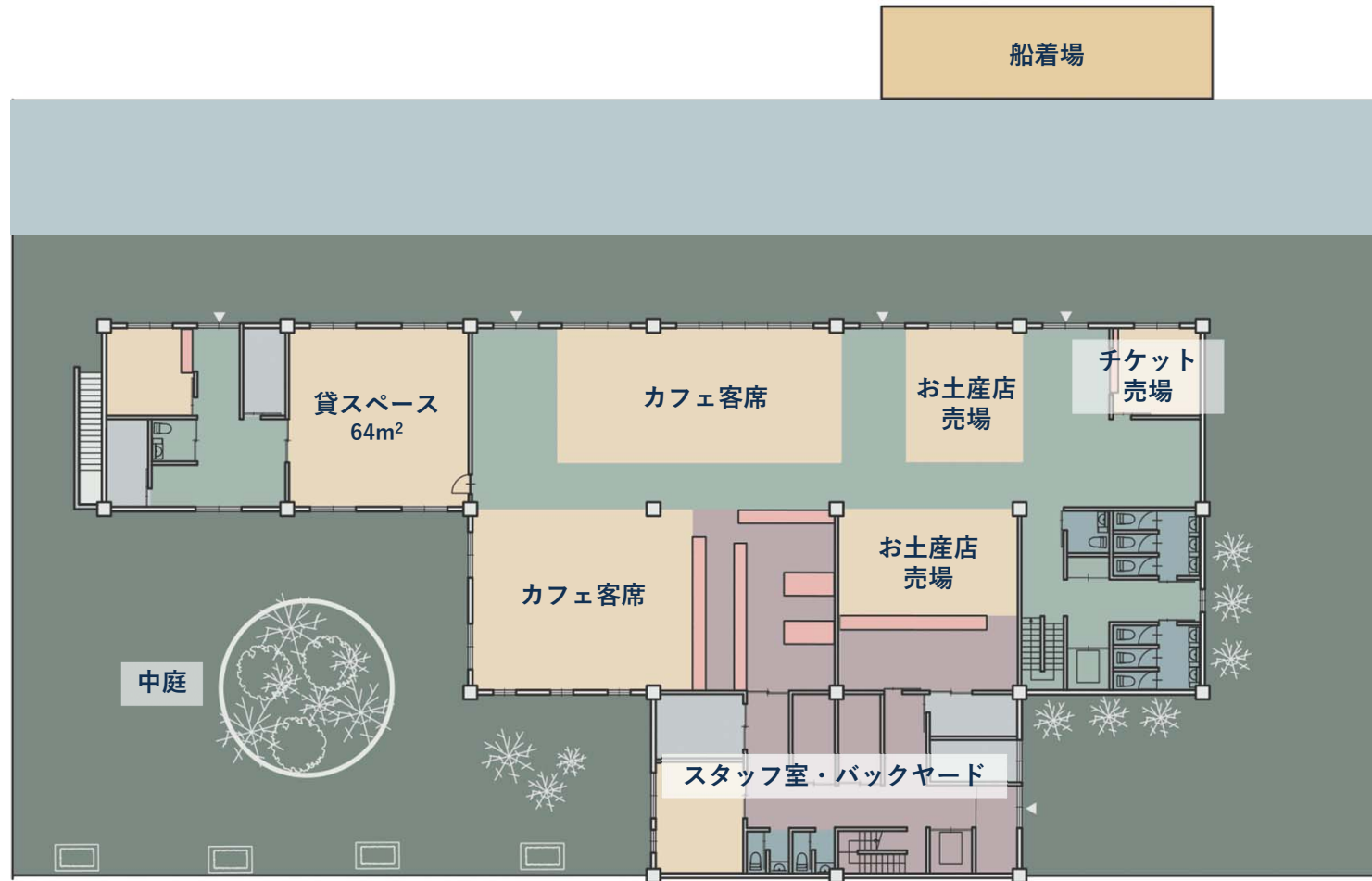


散策道からのアプローチ



夜間のイメージ

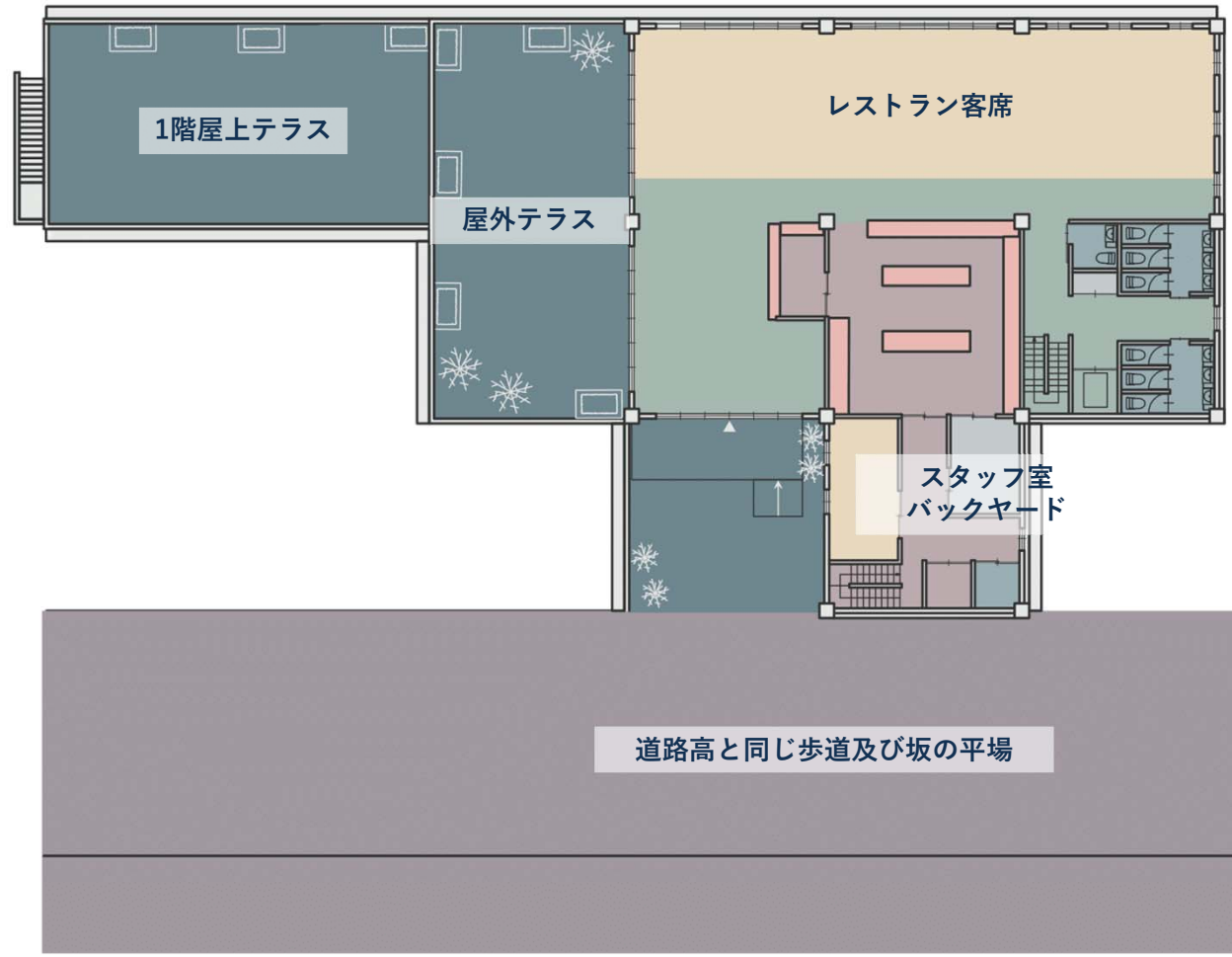
水辺の複合施設 B1階平面図



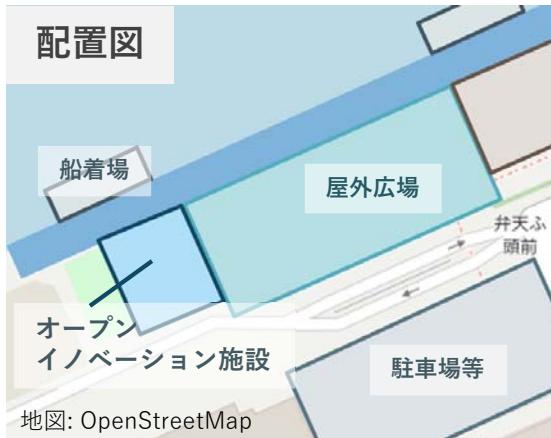
※室の床面積は柱心間で計算。



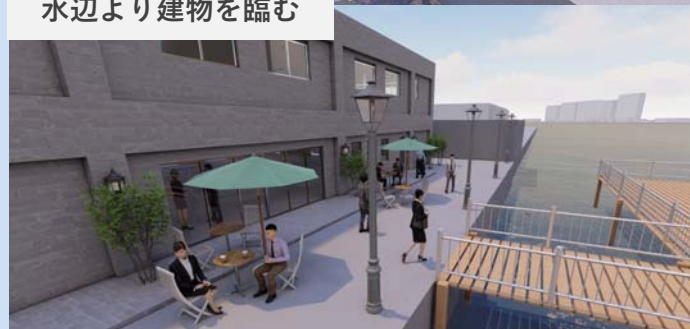
水辺の複合施設 1階平面図



水辺のオープンイノベーション施設



水辺より建物を臨む



中庭

水辺から始まるイノベーション

弁天埠頭にオフィス施設を整備する最大の利点は、交通の利便性の高さである。弁天埠頭は、弁天町駅付近にあるため、大阪都心部へのアクセスがしやすく、海上交通を使うことで夢洲の物流・産業ゾーンへのアクセスも可能である。

この利点を活かして、夢洲を始めベイエリアと連携してビジネスを展開することやこれらの地域のまちづくりに参画することを目的に事業に取り組むベンチャー、スタートアップ企業や個人事業者を対象にしたオフィス空間を提供する。

施設案内

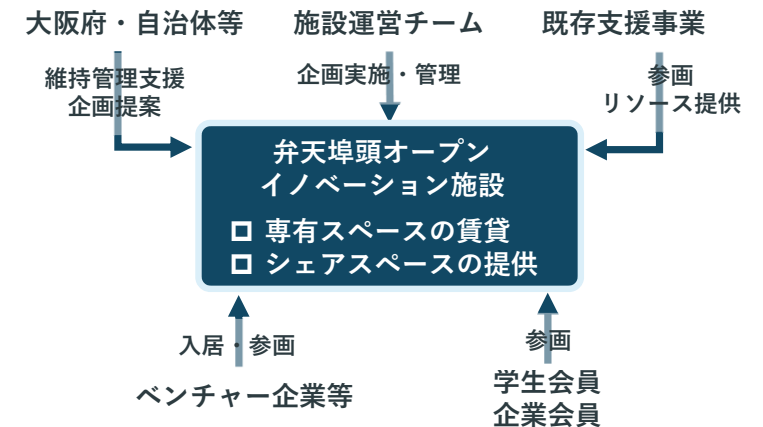
- 1F 専有オフィス(6室)
- ミーティングルーム
- 交流ラウンジ

- B1F 会員シェアスペース
- 研修室
- 来賓室
- 交流ラウンジ

想定される運営体制と施設利用

大阪府の商工労働部では、ベンチャー企業や起業家の成長を支援するプログラムを展開している。施設を有効に活用するために、大阪府の既存事業等と連携して入居者を募集しその成長を支援する体制を構築する。

また企業同士の交流や起業に興味を持つ学生への働きかけにも活用できるよう会員制度を設け、会員であれば施設内のシェアスペースを利用できるほか会員向けのセミナー等の開催も考慮する。



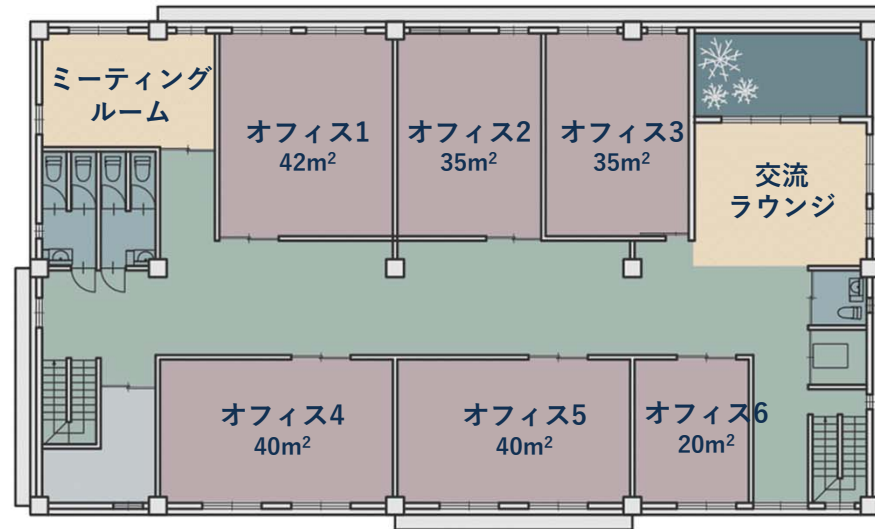
水辺のオープンイノベーション施設 B1階平面図



※室の床面積は柱心間で計算。



水辺のオープンイノベーション施設 B1階平面図 (scale1:250)



※室の床面積は柱心間で計算。

